センター研究報告会2012
――研究報告と指定討論

船橋新太郎（こころの未来研究センター教授）
Shintaro FUNAHASHI
カール・ベッカー（同教授）
Carl BECKER
鎌田東二（同教授）
Toji KAMATA
加藤忠史（理化学研究所脳科学総合研究センター）
Tadafumi KATO

ものの好みはなにで決まる？

船橋新太郎

ものの好みが決まる仕組み

気に入った風景の場所に行けば、何時間でもそこに佇んでいられるし、気に入った音楽ならば何度聞いても飽きない。好きな絵画を見るために、それが展示されている美術館を何度も訪れたり、好きな音楽を聴くために何度も海外に出かけたりする人がいるように、絵画や音楽、自然の風景は人のそれへの行動を誘発する。好きな絵画、好きな風景、好きな音楽による美的な体験は、人の生存に不可欠なものではないにもかかわらず、私たちがこのようなものに引かれるのは、「美しい」「すばらしい」といった感情を持つとき、同時にpositiveな感情が惹起されるからだと考えられる。したがって、好きな絵画、好きな風景、好きな音楽などは、ある種の報酬としての機能をもち、人の行動に影響を与えていると言うことができる。ものの好みの判断も、それを見たときに生じる感情によって左右され、positiveな感情が惹起されるかどうかが要因の1つになっていると考えられる。どのような仕組みでものの好みが決まるのか、その仕組みの探求は人のこころの働きの理解に役立つと考えられる。

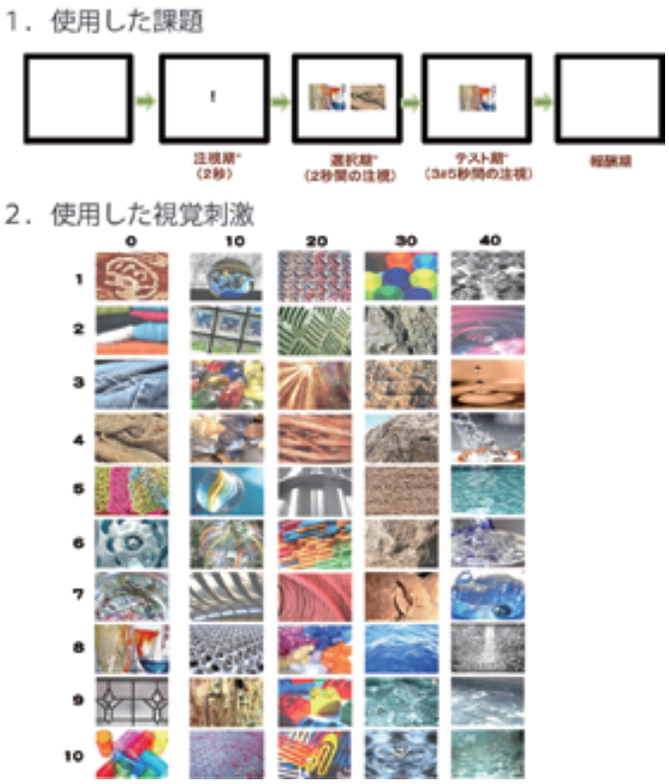
美醜や好ましさの判断に関わる前頭葉眼窩部

ものの好みの判断では、それを見たときの美醜の感覚が一要因として働いていると思われる。最近、美的判断がどのようにして行われるのか、脳のどの部位が関わっているのかに関する研究が行われている。たとえば、Kawabata & Zeki（2004）の行った脳機能イメージング研究では、さまざまな絵画を含む視覚刺激を実験協力者に呈示し、美醜の判断をさせると同時に、それらの視覚刺激を見ているときの脳活動を計測した。その結果、美しいと判断した刺激が呈示されたとき、前頭葉眼窩部が賦活されることから、美的かどうかの判断に前頭葉眼窩部が関わっていることを明らかにしている。また、Kawabata & Zeki（2008）は、実験協力者に欲求度の強さにより視覚刺激を分類させ、それらの刺激の呈示による脳の賦活部位を調べたところ、欲求度の高い刺激呈示で前頭葉眼窩部が賦活することを明らかにしている。さらに、O'Dohertyら（2003）は、魅力的な人の顔を見たときに前頭葉眼窩部が賦活すること、この賦活は笑い顔を見たときに増強されることを報告している。このように、ものの美醜や好ましさの判断に前頭葉眼窩部が関わっていることが最近の研究で報告されている。そこで、ものの好みの決定や判断に前頭葉眼窩部の神経活動がどのような関与をしているのかを明らかにすることにより、ものの好ましさの判断に関わる仕組みを理解できると考えられる。

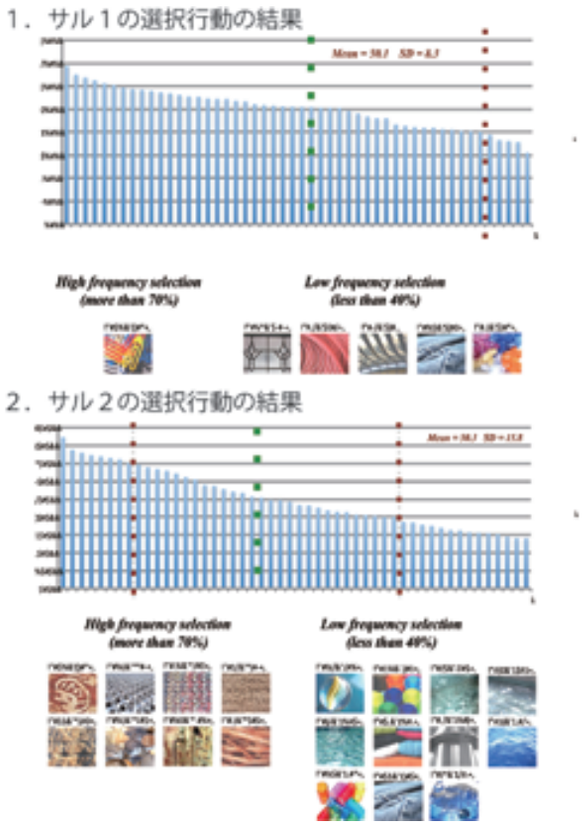
一対比較法を用いた行動実験

ものの好ましさの判断に関わる神経メカニズムを前頭葉眼窩部で検討するには、まず、どのような刺激が好まれるのか、好まれる刺激の特徴を明らかにする必要がある。ものの好ましさの強弱は、一対比較法を用いて行われることが多い。一対比較法とは、ものを2つ同時に呈示し、その中から好ましいと思う方を選択させるもので、さまざまな組み合わせでこのような選択を行わせ、選択の度合いをもとに順位付けを行う方法である。

今回の研究では、被験体として4頭のニホンザルを使用し、一対比較法により視覚刺激の選好性とそれを決定する要因を検討した。使用する視覚刺激はFlickr Material Databaseから選択した写真で、布の写真が5枚、ガラスの写真が11枚、金属の写真が9枚、プラスチックの写真が6枚、岩石の写真が6枚、水や水面の写真が13枚の、計50枚を使用した。ヒトにとっては身近にあるものであり、日常的に目にするものが多いことから、経験や先入観などの要因が選好性を左右することが考えられる。そこで、今回使用する刺激に関する経験や先入観をもたない動物を使って実験を実施した。



画面に呈示される視覚刺激のようすと、使用した50枚の視覚刺激。



50枚の刺激の選択率を高いものから順に並べた図。２頭のサルの選択率の高い刺激と低い刺激を例として示した。

50枚の刺激に対するサルの選好性の有無と選好性を決める要因を、一対比較法を用いた行動実験により検討した。50枚の刺激の中からランダムに選択された２枚の刺激をモニターの左右に同時に呈示した。サルがどちらかの刺激を連続して１秒以上見続けたら、その刺激を選択したと見なした。さらに、モニター中央に選択した刺激のみを最長６秒間呈示し、それを見続けた場合、その刺激を選択した刺激と判断した。この課題を行わせた全試行をもとに、各刺激が呈示された総数とその刺激が選択された総数から選択率を求め、その値をもとに刺激選好性の強さを評価した。サルの眼球運動はEyeLinkを用いて計測した。写真の呈示を含む課題の制御、ならびに、サルの行動の解析や記録はTempoプログラムを用いて行った。

鮮明度の高い刺激は選好性が高い

刺激によりサルの選好性に違いが見られ、また、サルにより刺激の選好性判断に大きな違いが見いだされた。選好性判断が刺激に含まれるどの要素により影響されるのか、一般的な特徴が存在するのかを決定する目的で、Photoshopを用いて加工した各刺激を用意し、同じ刺激どうしの組み合わせで選好性を検討した。色の有無が選好性判断に与える効果を検討する目的で、同一刺激の色付き条件とモノクロ条件での選好性を比較したところ、色付き刺激を選択する比率がやや高いものの、色付き刺激が好まれる明確な結果にはならなかった。刺激の鮮明度の効果を調べる目的で、原刺激と鮮明度を下げた刺激とで選好性を比較したところ、鮮明度の高い原刺激を選択する比率が圧倒的に高かった。選択率が鮮明度に影響されていることを確かめるため、刺激に含まれている空間周波数成分の強さと選択率の相関を調べたところ、正の相関が見いだされた。50枚の原刺激を使った一対比較では、選好性の強さは刺激に依存すると同時に、刺激の選好性判断は個体差の影響を大きく受けた。刺激に含まれる空間周波数成分の強さと選択率との間には、どのサルでも正の相関が観察され、刺激の鮮明度がこの場合の選好性判断にも影響を与えていることが明らかになった。また、色彩の影響は弱いが選好性判断に影響を与えていること、写っているものの材質や光沢の有無、輝度は刺激の選好性判断にあまり影響しないことが明らかになった。

今後の展望

行動学的研究により、刺激の選好性判断に影響を与える刺激パラメータが明らかになると同時に、個体に

より選好性の強さの共通する刺激や異なる刺激が明らかになった。今後はこれらの刺激特徴と個体差を利用して、前頭葉眼窩部のニューロン活動を解析し、ものの好みの決定に前頭葉眼窩部の神経活動がどのような関与をしているのか、ものの好みを決める仕組みはどのようなものかを検討していきたい。

看護師の燃え尽き：こころが職場に及ぼす影響

カール・ベッカー

こころが態度や身体に及ぼす影響

日本の高齢化に伴い介護や看護のニーズが激増している一方で、介護者や看護師は慢性的に不足している。3年ほど前、厚生労働省が「高齢者を在宅で世話する」方針を打ち出して以来在宅介護が急増し、その結果介護者の燃え尽きをはじめ、家庭での高齢者虐待などの問題が深刻化している。医療現場では、燃え尽き寸前状態の若手の看護師が多く、暴力行為にまで至らないとしても、患者に冷淡に接したり、医療ミスを犯す傾向が見られ、離職率も高い。若手でなくとも医療従事者を取り囲む労働環境は厳しく、過重労働、不規則勤務、人員不足はなかなか改善されない状況が続いている。

本発表では、これまでに筆者がまとめた介護者研究と、現在継続中の新看護師研究を症例として、こころという精神面が態度や身体に及ぼす影響について紹介し、最後に課題を提示したい。

処理能力感ややりがい感の役割

介護に関して言えば、100万人余りの高齢者が在宅ケアを受けている中で、暴力問題に及ぶケースはわずか1パーセント前後であるが、絶対数にすると、1万件近くの事件が起きていることになる。100万もの世帯に常時派遣して見守るほどのヘルパーは存在しないし、派遣したとしても大多数の場合は無駄になるだろう。しかし前もって暴力問題を起こしやすい世帯を特定できれば、派遣するヘルパーは1～2万人程度で済み、人的・経済的な負担をかけずに多くの暴力を回避できる可能性が高い。

従来の研究では、介護者の夜間起床回数と、介護を受ける人の認知症の程度とが、暴力と最も深い関係にあるとされてきた。しかし、その情報だけでは、暴力問題に発展しやすい1～2パーセントの世帯にまで絞ることができなかった。そこで、こころの未来研究センターのチームでは、精神的な「処理能力」（処理能力感）や「やりがい感」などが大きな役割を果たしているのではないか、という仮説を立てた。

大阪、京都、島根などのソーシャルワーカーのサポートを得て、177例の在宅ケアに関する情報を収集した。処理能力感ややりがい感はアントノフスキーのSOC（センス・オブ・コヘレンス）尺度（『こころの未来』でも何度も紹介してきた）で、燃え尽きはMaslachのバーンアウト尺度で測定した。その結果、介護者の睡眠不足や被介護者の認知症よりも、処理能力感ややりがい感の方がはるかに大きな影響を及ぼしていることが分かった。したがって、患者を病院から在宅ケアに戻す際に、5分だけかけて、介護者となる方にSOCのテストを受けてもらい、回答者の中からSOCが極端に低い介護者に絞って、通常より手厚い支援・教育・レスパイトなどを提供する。それだけでも、介護者による高齢者虐待の多くは回避し得ると考えられる。なお、この調査報告と提言は、学術専門雑誌に投稿する予定である。

大規模な燃え尽き調査

では、看護師の場合はどうであろうか。近年、若年看護師の燃え尽き率の高さが指摘され、新人に対する教育介入の必要性が高まっているが、研究の方はまだ十分とは言えない。また、これまでに職場環境や教育などの改善方法が試されてきたが、問題の根本的な解決には至っていない。そこで、前例のない大規模な燃え尽き調査を計画した。この調査の母体となっているのは、京都大学では、医学部の赤澤千春先生を中心として、SOCと医療改善を目指して過去10年にわたって開催されてきた看護師研究会である。この会の蓄積に加え、研究会に出席する看護師の見解に基づいて、アンケート調査の項目が策定され、現在は3年にわたる調査の最終段階にある。

調査内容を具体的に述べると、平成22年度、近畿圏内の1，187件の病院に協力を依頼し、承諾を得られた114の病院の新人看護師1，330人に対して、3年間にわたるアンケート調査を実施している。調査は原則的に同一質問紙を用い、平成22年度に4回、平成23年度に1回実施し、平成24年度末にも実施する。回収したデータはその都度分析をし、SOC研究会で臨床や新人育成に携わる看護師と議論を重ねている。これまでの調査の継続回答者は800人以上にのぼり、そのうち欠損値のない回答者は617名であった。協力者の内訳は、男性53名、女性564名であり、女性が約9割を占めている。平均年齢は24歳であった。

3つの仮結論

分析はまだ終わっていないが、現時点での仮結論を紹介したい。すでに以下の3点が明らかになっている。第一に、SOCの有意味感（やりがい感）が高い新人看護師ほど、環境負担の職場ストレスを受けない傾向にあることから、有意味感が職業ストレスの心理負担を軽減しているようである。第2に、SOCの有意味感が高い新人看護師は自己成就して

いたのに対して、有意味感の低い新人看護師は冷淡になり、離人化していた。人間関係を含む環境や仕事の負担はストレスのもっとも大きな要因であったが、SOCの有意味感は、良い方向に大きな影響を及ぼしていたのである。これは、上記で紹介した介護者に関する研究結果に近い。結果自体には驚きはないが、SOCの有意味感を教育や支援などでいかに高められるか、介護者や介護師の燃え尽きを防ぐ次の段階の課題と言えよう。

第三に、燃え尽きのタイミングについて、さらに重要な発見があった。分散分析の結果、燃え尽き状態になる新人看護師の多くは、入職して3ヵ月程度の間に仕事に意味を見いだせなかったり、仕事が自分の思うように出来なかったりすると、ストレスを強く感じ、燃え尽きの兆候を示す。3ヵ月目以降、新たに燃え尽きの兆候を示す新人看護師の数は減るが、一方で燃え尽きの下位尺度である情緒的疲弊、すなわち「これ以上働けない」という感情や、患者に対し自分が消極的になる「離人化」という感情は、新人看護師すべての間で1年間を通じて上昇し続けた。なお、深刻な燃え尽き状態に陥る傾向にあるのは、入職3ヵ月以内に燃え尽きの兆候を示した者であった。つまり、入職初期の悪い「第一印象」が尾を引いたことになる。他方、入職3ヵ月目の時点で低位になっていた有意味感が2年目に入り有意に上昇している事例も確認できた。それは、当初仕事に意味を見いだせなかった場合でも、仕事や環境に慣れ、後輩を迎えることで、自分の仕事や周囲の状況を把握し、意味を見出す能力を取得したと解釈できるだろう。

今後の課題

以上から、今後、入職から三ヵ月の期間に焦点を当てた教育プログラムを検討する必要があると言えよう。さらに仕事上の負担や職場環境などのストレスをいかに低減できるかのみならず、ストレス対処能力SOCをいかに高められるかが、今後の課題となるであろう。

〈「はじ」の文化〉再考～『古事記』からルース・ベネディクトまで

鎌田東二

「罪の文化」「恥の文化」

ルース・ベネディクトが1946年に出版した『菊と刀――日本文化の型』は、日本の占領統治を目的として「日本文化」を研究した成果物で、1948年に翻訳されてベストセラーになった。その著作の中で、彼女は、「道徳の絶対的標準を説き、良心の啓発を頼みとする社会」を「罪の文化」とし、対して、「他人の行動の中に看取されるあらゆる暗示に油断なく心を配ること、および他人が自分の行動を批判するということを強く意識する」（たとえば、昨今に言う「空気を読む」なども含まれるだろう）社会や文化を「恥の文化」と位置づけた。彼女はまた、「真の罪の文化が内面的な罪の自覚にもとづいて善行を行なうのに対して、真の恥の文化は外面的強制力にもとづいて善行を行なう。恥は他人の批評に対する反応である」、「日本人は恥を原動力としている」、「（日本人にとって）恥は徳の根本である」（長谷川松治訳、講談社学術文庫）などと述べている。この日本人の心と行動パターンを「日本文化の型」として文化人類学的に研究した著作は、今日の文化心理学や社会心理学から見ても興味深く見過ごすことのできない「古典」的な著作である。

記紀神話に見る「はじ」

さて、2012年は、『古事記』編纂1300年、『方丈記』著述800年という節目の年に当たり、両「古典」をさまざまな角度から読み解く著作が刊行され、シンポジウムが開催された。わたしも『超訳古事記』（ミシマ社、2009年）に続いて、『古事記ワンダーランド』（角川選書、2012年）を上梓した。その過程で、『古事記』を題材にすると、ルース・ベネディクトの言う「恥の文化」が思いもかけない相貌で立ち現われてくることに気づかされた。

本年度の研究報告会のテーマである「感情と身体」に即して言えば、「はじ（辱・恥）」という「感情」は、「神々」の「身体」のある種の異様さに伴って強烈に生起する、と『古事記』や『日本書紀』には記されていたのであった。ベネディクトは記紀神話を題材にしていないが、それを題材にする限り、「はじ」とは外面的・社会的制裁力などという言葉でまとめることのできないほど強力に「神々」の「感情」を激発させる源泉となっている。

ここではひとまず「負の感情」を「自他の関係性や存在様式を破壊に導く感情」と定義し、そうした破壊的「負の感情」としての「はじ（はぢ）」の感情を『古事記』と『日本書紀』という最古の「古典」を通して吟味していく。

イザナミの激烈な「はぢ」の感情

第一に、女神イザナミノミコトが自分の姿（死体）を夫イザナギノミコトに見られたときに「吾に辱（はぢ）見せつ」と怒りと悲しみの感情を激発させて、呪いと共に絶縁している。

このイザナミの激烈な「はぢ（辱）」の感情を、本居宣長は『古事記伝』の中で「令見辱（はぢみせつ）。恥を与るを、恥見ると云は古語なり」と注釈するにとどめている。近年の倉野憲司も『古事記全註釈』で「私によくも恥辱を与えたの意」とだけ記し、西郷信綱は『古事記註釈』において「視るなといったのに視たので、かくいう。

ただ『恥見せつ』は、たんに恥ずかしいというより、もっと怒ったいいかたで、よくも恥をかかせたという意。だから逃げる男神を女神は追っかけるわけで、それにたいし豊玉毘売は我が形を見られ「甚作(いとは)づかし」といって本つ国にもどっていったとある」と「見るな」のタブーを破ったことに言及しているのは注目に値する。

しかしながら、本居宣長、倉野憲司、西郷信綱という『古事記』研究・全注釈の代表的な碩学の見解は、いまだ「吾に辱見せつ」の激烈さ・深刻さを認識していないように見える。ここで、『古事記』において初めて「負の感情」の爆発が起こっているのだが、これをどう捉えるかが大変重要な問題で、これがひいては『古事記』全体の解釈にも多大な影響を与えるのである。

イザナミという「いのちの母」が、怒りと悲しみに満ちた「はぢ（辱）」の感情の激発によって、1日に千人の「いのちを殺害する破壊神」に大逆転するのだから。その変貌の影響は凄まじいのだ。なぜ「はぢ（辱）」という感情はかくも破壊的に作用するのか？　それが問題の根っこである。残念ながら、ルース・ベネディクトも本居宣長もこの問題の深層に迫ることができなかった。

ここでは、「はぢ」は世界に修復不可能な亀裂・断裂・分裂を生み出す感情の源泉となっている。『古事記』に語られるこのイザナミの「はぢ」の感情の深さと恐ろしさを侮ってはならない。

このイザナミの発した「負の感情」を全面的に受け継いだのがスサノヲノミコトである。なぜ、彼が小さい頃から「妣(はは)の国」に行きたいと泣き叫んでいたか？　なぜ、イザナギの鼻から化成したスサノヲは、世界に万の災いをもたらすほどに母・イザナミを恋い慕ったのか？　これについての詳細は拙著『古事記ワンダーランド』に譲るが、このスサノヲに受け継がれた「負の感情」が晴らされたのが、怪物（八俣大蛇）退治と歌の発声（発生）においてであったことには注意すべきだ。「歌」は、禊や祭りと同様に、「負の感情」の鎮め方、晴らし方として、きわめて重要な方法となるのである。

別離と死をもたらす破壊的な感情

『古事記』におけるにもう1つの「はぢ」の事例を挙げておく、海神の娘のトヨタマビメが出産する際、本国の姿の「鰐（鮫）」の姿になって出産するが、そのとき、夫のホヲリノミコト（山幸彦）に見られたために、「いとはづかし」と言い残して、海の国に還ってしまって、2人はその後2度と会うことはなかったという記述である。一方、『日本書紀』には、大物主神が「小蛇」の姿となった自分の正体を「神妻」のヤマトトトヒモモソヒメに驚かれたときに、「汝不忍令羞吾。吾還令羞汝」（汝が私に恥をかかせたので、私も汝に恥をかかせよう）と「感情」を激発させ、それが元でヒメは箸でホト（女陰）を突いて死んだことが記されている。ここでも「はぢ」は別離と死をもたらす破壊的な感情となっている。

美意識を伴う〈身体的感情〉

このような、記紀神話に「神々」の激烈な「感情」として表出される「はぢ」の「感情」がみな「身体」に喚起されて現われていることに注目したい。これを、ルース・ベネディクトが『菊と刀』で指摘したような、日本人を「善行」に促す「外面的強制力」とか、「徳の根本」であるなどと簡単にみなすことはできない。それはもっと深く内奥に突き刺さり身心および関係性を破壊的な攪乱にまで導く、倫理性よりも強い美意識を伴う〈身体的感情〉であり、その感情の鎮め方が禊祓と祭と歌の発生を導き出すと『古事記』は示唆しているのである。

参考文献
鎌田東二『超訳古事記』ミシマ社、2009年
鎌田東二『古事記ワンダーランド』角川選書、角川学芸出版、2012年

指定討論

「界面活性剤」としてのこころの未来研究センターの役割への期待

加藤忠史

3つの話で異なる感情と身体

研究報告会では、感情と身体ということで、3つのお話を伺いました。通常であれば、この3つの話の間にはまったく接点がありません。研究者も、研究方法も、発表方法も違います。これらの3つの話を同じ学会で聴くということはあり得ないように思います。

にもかかわらず、こうして1つのトピックとしてまとめ上げて議論できたということ自体が驚くべきことで、このこころの未来研究センターが貴重な存在であることを再認識させられました。

3つの話に出てきた感情と身体はそれぞれ異なります。

船橋先生のお話では、感情とは好き嫌いという比較的シンプルな感情。そして身体とは、感情の物質的基盤としての脳です。

一方、ベッカー先生のお話では、感情は対人関係における感情であり、少なくとも2人の人と人との間で生まれるものです。そして、ここで問題になっている身体とは、看護の対象、あるいは疲れる身体、いずれにせよ、感情の対象としての身体です。

鎌田先生のお話の中では、感情とは、さらに、人と人というレベルを

超えて、社会の中で共有され、文化を特徴づけるものです。そして、『古事記』における神々の身体とは、もはや物質的存在を越えて、本性という、もっと象徴的、形而上的な存在を示しているように思いました。すなわち、船橋先生のお話の中では、感情の物質的な基盤という、最も物質的な存在であった身体が、ここでは、感情を呼び起こす形而上的な存在として、完全に逆転した意義をもっています。

特徴的な研究手法

研究手法でも、それぞれ特徴的な面が見られました。

船橋先生とベッカー先生のお話では、そのレベルには違いがあるにせよ、要素に分ける、という手法がとられている点で共通していると思いました。船橋先生が感情を図形の好き嫌いというシンプルな要素に分解して解析されたのは、脳の生理学的解析では、すべての細胞を解析することはできず、限られた細胞群しか調べられないため、それと対応づけるためには、心理の方を要素に分解する必要があったためだと思います。

一方、ベッカー先生のお話では、燃え尽きという複雑な感情では社会的対応が難しい中で、Sense of Coherenceという要素を抽出することによって、社会的な対策の枠組みを提供する道筋を開いたということに意義があると思います。

鎌田先生のお話からは、要素に分解するという方向とは逆に、要素から全体へと広げていく、という強力なベクトルを感じました。『古事記』および『菊と刀』という、千年以上の時を越えた文献に見られる共通性の中から、恥、という一見、まったく個人的な、限局した感情のように見えるものが、日本という社会、文化を創り上げる重要な要素となっていることを示されたわけです。

問題は階層間の界面で起きている

われわれは炭素、水素、酸素などの原子から成り立つ、明らかに物質的存在であると同時に、物質から成り立つ脳により支えられた感情を持ち、感情を持つ個体同士が集まって社会を作り、文化を創るという、まことに多次元的な存在です。

このように、われわれの生きる世界が多次元的であるからこそ、この世界で起きている問題の多くは、これらの階層の間の界面、すなわち境界線で起きていることなのだと思います。

今朝のニュースで、米国で、小学校に侵入した男が、20人もの幼い子どもたちの命を銃で奪うという事件が起きたことを知りました。なぜこんなに悲惨なことが起きなければならないのか。銃規制ができないという、米国の社会的背景が原因とも考えられますし、同時に、射殺された犯人の母親は、犯人が襲撃した小学校の教師であったとの報道もあるようですので、何か親子の間の感情的な問題という可能性もあります。また、犯人が何らかの精神障害を持っていたらしいという報道もあるようです。

私たちの研究室では、精神疾患のゲノム研究をしていますが、最近、両親では存在しないようなゲノムの変異が生じて、精神疾患を起こす場合があることが報告されました。これは、父親の年齢が高くなるにつれて、精子のゲノムに変異が入りやすくなり、変異の入った場所が運悪く神経発達に関係のある遺伝子だと、脳の発達に影響し、精神障害を発症する、というわけです。そのほかに、ゲノムを両親から受けついだ時点では存在しなかった変異が、発達中にに、脳のゲノムだけに生じてしまうような場合もあるのではないかと推測して研究を進めています。

このように、1つの問題をとりあげましても、分子から社会まで、異なる階層に関するさまざまな視点があり、すべてが階層を超えて、互いに関係しあっているのです。

界面活性剤としてのセンターの役割

このように、私が専門としております精神疾患の問題をはじめとして、出生前診断、臓器移植など、物質としての身体、それが生み出すこころ、そして社会との界面で、多くの社会問題が起きています。

それだけでなく、今回の総選挙の争点になっている原発の問題や経済の問題にしても、その根源には、この人間社会の多次元性が基盤にあるように思えます。

昨今問題になっている領土問題にしても、領土は国にとっては身体のようなもので、神々が身体を見られて感情を爆発させたイザナミの話に、どこか通じるところがあるように思え、さまざまな見方がありうるのではないかと感じます。

われわれ人類は、こうしたさまざまな社会問題、すなわち、犯罪、貧困、精神疾患、エネルギー問題、戦争などに、いまだに有効な対処ができていません。こうした社会問題が、身体、感情、社会、文化という多次元的な存在としてのこの人間社会において、これらの界面で起きている摩擦だと捉えることができるとすれば、これらの界面の間をつないで、この複雑な人間社会に取り組む道筋を探究することが何より重要となります。

しかし、現代では、学問が細分化して硬直した結果、社会問題への有効な解答を提示することができていないわけです。

そういう社会の中で、このこころの未来研究センターは、水と油のような学問領域を融合させる、まさに界面活性剤としての役割を果たしつつある、というふうに感じました。

今後のセンターの活動に、ますます期待したいと思います。